

## 「みち」 令和4年3月15日 発行

先生方と学び合えたことに感謝します  
～教員ジャンプアップ研修～

今年度の「教員ジャンプアップ研修」は、31名の先生方から申し込みをいただきスタートしました。コロナ禍にあって思うように訪問できない時期もありましたが、多くの先生方と、普段の授業や子どもたちとの生活の様子、実務的な内容などについて、率直に語り合い、学び合えたことをたいへんうれしく思います。

授業と授業研究を第一優先にした学校づくりを推進していただいている中で、真摯に学ぼうとしている先生方の思いを、いつも感じながら研修を進めさせていただきました。私たちがまだまだ伝えきれなかったこと、先生方がもっと学びたかったことはたくさんあったかとは思いますが、ともに学び合えたことに感謝いたします。

研修に取り組んだ先生方の言葉を紹介して一年間を振り返るとともに、来年度に向けてより一層充実した研修ができるよう準備を進めてまいります。



## 教員ジャンプアップ研修を振り返って

- 自分の授業づくりや指導する際のポイント、学級経営などを手探りで行っていたので、不安なところや分からないところを聞くことができた。
- 授業の進め方や児童とのかかわり方などを丁寧に指導していただき、以前より自信をもって授業ができるようになった。
- 発達段階に合わせた楽しい学習になるように工夫する中で、子どもたちのやる気を引き出すことができてよかった。
- 教えていただいたことを実践していくことで、子どもたちの目が輝いてきて、少しずつ教師として成長することができたと感じた。
- 授業の内容だけでなく、授業の形態や生徒の様子など、普段の授業研究では見ていただけないような点についても指導していただき、とてもためになる研修だった。
- 安心感を持ちながら職務を遂行することができた。
- ただ話して終りではない保健指導に感銘を受けた。内容や教材だけでなく、話し方・表情にまでさらに意識しながら頑張っていきたい。
- 自分自身を振り返る視点と余裕が確認できた。
- 子どもにあったワークシートの作り方が分かってきた。
- 子どもの学びの様子（目の付け所、つぶやき）が見えるようになった。
- 子どもたちとともに、一から活動を計画し実現させていく経験ができ、とても勉強になった。



(アンケートより一部抜粋)

## ポジティブな関わり合い

「ステイ・ポジティブ」  
平昌五輪の日本カーリングチームがテーマとして掲げていたものだが、そのポジティブな姿勢は北京五輪でも貫かれていた。

TV中継の中で、「ナイススイープ！」  
「ありがとう！」という感謝の言葉が幾度となく飛び交う場面を目にした。また、うまくいかなかった時も、励ますような言葉や表情を決して忘れない姿もとても印象的だった。こんな彼女たちのポジティブさは、他の国と比べても抜きん出たものだった。

吉田知那美選手は言った。

「苦しい舞台、大変な舞台で苦しそうな顔、つらそうな顔をするのは誰にでもできると思うんですけど、(苦しい中)楽しむには、たぶん覚悟がいる。」

これは、意識して編み出したポジティブなスタイルであることを示唆している。

氷の上で不安に思ったら口に出して言う。一人で抱え込まず、落ち込まず、お互いの状態が分かりプレーにも生かされる。不安やプレッシャーを全員で共有し受け止めれば軽減される。共有すればお互いの状態が分かりプレーにも生かされる。その意識の土台には、常にお互いを肯定する精神が根付いている。だからこそ、試合中どんな状況であろうと、ポジティブであることを貫く。それがチームの特色となり、最大の強みとなっている。

(Number Web より抜粋)

## 第2回 授業づくり研修会

2月25日、令和3年度第2回授業づくり研修会が、須賀川市立第三小学校において行われました。

第1回に引き続き、新型コロナウイルス感染症の感染状況を鑑み、会場校以外の先生方は、各学校からオンラインで授業を参観する形での開催となりました。講師の秋田喜代美先生にもオンラインで授業を参観後、講話をいただきました。

1年算数科の授業を通して、子どもたちが友達と一緒にジャンプの課題に取り組みながら、学びを深めている姿がとても印象的でした。・・・ペアの友達と相談しながら・・・、隣の友達の考え方を見ながら・・・、先生や友達に支えてもらいながら・・・。先生方が、この一年間、1年生の子どもたちの学びを支え、関わり合ってきた様子がよくわかりました。



### 秋田喜代美先生の講話から

—これからの授業や学びを考える時に—

#### 個別的な学びと協働的な学びに関する前提1

- 「主体的・対話的で深い学び」を実現するためである。
- 子どもは本来生まれた時からAgent（主体）である。
- 最終的に子どもの学びの主体性を活かし、深い学びに導くためであるから、授業の手法論としてとらえるにとどまるのではなく、子どもの学びのプロセスを捉え、子どもの視点や姿と学びの深まりにおける働きを捉え論じていくことが大切。

#### 前提2 個別的学び、協働的学びのいずれもが学びの質、集中・没頭が必要

#### 前提3 環境を通しての教育と足場かけがこれからの学びの鍵である。その構成者は教師のみではなく、子ども同士が共同構成者である。

- 人は一人では学べない。他者（現前、過去）と共に学ぶ。
- 対話（自己内対話、非言語的やり取りを含む）を通して学ぶことが必要である。そこには教師だけではなく子どもも、教室外の人もまたその支援をする他者となる。
- そして学ぶためには、新たな学びの世界をひらくための支援をする（足場をかける）ことで、人は主体的に学ぶことができる。そこに学びの喜びがある。

#### 聴くことに始まるスロー教育学 Slow Pedagogy

- 「聴き合うかわりかたは、聴き方、聴き合い方を教えてできるものではない。どれだけ形を教えても、どれだけトレーニングを積んでも、それだけで聴ける子どもは育たない。『聴く』ということは、内面的な心のはたらきと、そこに存在する他者関係によって微妙に変化するものだからである。子どもの心のはたらきに頓着せず、子どもの他者関係を築くための人間的なはたらきかけもしないで、聴ける子どもを育てることなどできない。」
- 「一人で考えられることは知れている。豊かに学ぼうとすれば、他者から学び取るしかない。それには、他者のことばに耳を傾ける態度が不可欠である。」(2/25 秋田喜代美先生)



終わりが見えないコロナ禍ですが、充実した研修が各学校で推進されていることに感謝申し上げます。令和3年度の教育研修センターの事業についても、たいへんお世話になりました。来年度も、先生方それぞれの課題解決のお役に立てるよう充実を図ってまいります。次年度も教育研修センターの活用をよろしくお願いいたします。

